

戦禍に巻き込まれた動物たち

小 松 守

(秋田市大森山動物園 園長)



「マカリウのハチ公」、インパクトある報道見出しの記事が写真と共に4月に掲載された。

今年2月末に始まったロシアによるウクライナへの軍事侵攻でウクライナの平和な暮らしは一変、戦禍に苦しむ日々が続いている。そんな中、主人への忠誠心を忘れずに健気に生きる秋田犬を紹介する心打つ記事が配信された。それが「マカリウのハチ公」だ。

本当の名はリニ、ウクライナの首都キーウ近郊のマカリウ村に住む未亡人が飼っていた秋田犬だ。リニを大事にしていたその人はこの戦禍の中、ロシア兵により連れ去られ惨殺されたらしい。それを知らないリニは、1か月近く家の玄関先で砲弾音に耐えながら主人を待ち続けたのだ。写真で見るリニはもの悲しそうに遠くを見ながら元気なく座していた。渋谷の「忠犬ハチ公」と重ね合わせたウクライナ版ハチ公の話題は共感を呼び世界中に広まった。

心配した人たちがリニを引き取ろうとしたが、主人への思いが強く、頑として玄関先から動こうとしなかったらしい。正に忠犬であり、人と動物の絆の強さを感じさせる物語である。

渋谷のハチ公もウクライナのハチ公も同じ秋田犬で飼い主への忠犬ぶりは流石であるが、違う点はウクライナのハチ公は戦禍の被害者であることだ。世界中がこの物語に共感したのは、言うまでもなくリニの忠犬ぶりだが、世界の人々は人もリニも理不尽な軍事侵攻の犠牲者であり被害者であることを意識していたからかもしれない。

擬人化すれば別だが、格を持たない動物に対し犠牲や被害の表現は使いづらい。飼育動物は人の財産であり物的な扱いだし、野に生きる動物は無主物で実態がわかりづらいからかもしれない。ただ、人の都合で引き起こされた戦争の場合、心情的には動物も犠牲者であり被害者と表現したくなる。戦禍に巻き込まれた時、人と同じように動物も生活が奪われ、最悪死んでしまう。動物を見舞う感情を抱くと同時に、戦争は無辜の動物にも犠牲や被害を強いていることを我々はもっと直視すべきではないだろうか。

ウクライナ侵攻が広がりを見せていた頃、TVで刻々と伝えられる戦禍の状況を見ていて、動物もいっしょに避難する印象的なシーンが目に残った。わずかな手荷物を携え列に並び避難する人の中に、まるで我が子を抱き歩くように、犬をコート内側に抱き入れて逃げる人が映し出されていた。家族であり、心の支えでもある愛犬を到底見捨てることなどできなかったのだ。戦争を理解しない犬だが、普通ではない空気を感じてか不安げな目が映し出されていた。カメラマンは犬にもフォーカスを当て、動物も戦禍の被害を受けていることを伝えたかったに違いない。

飼い主と避難できたとしても先は分からないが、避難できた犬は幸運だったのだろうと思いたい。動物を離さざるを得なかった人は心に何かしらの傷を負うだろうし、離された動物は厳しい生活を余儀なくされる。人も動物も同じように被害を受ける。



戦禍の被害者は犬や猫だけとは限らない。ヘビやワニ、鳥類などを飼育する人が動物園に引き取ってもらいたいとやって来る様子もTVで流れていた。特殊な動物のため飼育も難しいなど引き受け手は動物園などに限られるが、その動物園も若い飼育員が兵隊に取られ人手不足であり、また餌の調達も滞りなど園の維持自体が難しく、受け入れが難しい状態にあるようだ。ある小動物園では老園長が孤軍奮闘し飼育にあたる様子もTVが紹介していた。

ウクライナ最大のニコライフ動物園ではミサイルが着弾するなどの被害を受け、動物移動もできず一時危機的状況に陥ったらしい。空爆などが激しさを増す中、他の動物園では飼育員が死んだり負傷したり、動物も100頭近く犠牲になった。ライオン、トラ、クマなど猛獣の成獣は人の安全のため殺処分命令が出されていたようだ。動物たちもまさに戦禍の犠牲者、被害者である。処分指示を出す側、それを受け実行する側、共に心を痛める。戦争は人に無辜の動物に手をかけさせることを容赦なく強いて、人と動物の両方を苦しめる。

それは戦争のたびに繰り返されてきたのだろう。日本でも太平洋戦争で都市空襲が激化する中、各地の動物園で猛獣等の処分が行われていた。猛獣だけでなく3頭のゾウも処分された上野動物園の悲しい事実は童話「かわいそうなゾウ」になった。猛獣と同じように薬で処分を行おうとしたが、賢いゾウは薬を飲んでくれず、泣く泣く餌を切らざるを得なくなった。ゾウとの信頼関係を結んだ飼育員の心は張り裂けんばかりだったに違いない。人命優先は当然だが、飼育員を頼るゾウの命を奪わざるを得なかった悲惨さは動物園人としては居たたまれない。ゾウは餌を切られ空腹を余儀なくされ苦痛を受け、ついには犠牲になった。惨さを人に強要し、動

物に苦痛を与えた戦争は恐ろしい。

戦禍に巻き込まれた動物は目の前の動物だけではない。以前旅した九州の門司で港散策路にあった戦争モニュメントをたまたま発見した。門司港は満州事変から太平洋戦争にかけ多くの出征兵士を大陸に送り出した場所、その悲しみをモニュメントにし後世に伝えているが、その傍に立派な石造りの軍馬用水飲みが残されていた。門司は兵士とともに各地から集められた夥しい数の馬を大陸に送るための港でもあった。

送り出された馬は大陸に送られると二度と日本に戻って来ることはなく、戦地で皆犠牲になったと記されていた。馬たちは船に移される前、軍馬用水飲みで日本最後の水を飲ませてもらったのだ。別れの水を理解するはずもない馬たちは、たっぷりの水を喜んだに違いないが、馬を送り出す側には複雑な思いが交錯していたであろう。人も馬も戦争の犠牲者だ。

戦禍に巻き込まれたほんの一部の動物を取り上げ、人と動物の関係性を通し、別の角度から戦争の悲惨さを考えてみた。戦禍の最大の犠牲者、被害者は人であることは言うまでもないが、人と動物の共生が叫ばれる中、同じ命を持つ動物を遠くの存在として見過ごすことはできないように思う。人も動物も戦争では恐怖や苦痛、ひもじさや寒さなどを感じるはずだ。

人は動物と共に生き、また動物から学ぶことで平らかで和らいだ社会もつくりだして来だし、多様性を尊重する意識をも醸成させてきた。これからの社会、共生と寛容性が重要なキーワードになるようにも思えるが、戦争はそれに反している行為とも思える。写真のリニは「どうして人は争い、戦争をするの？」そんなことを言いたげだ。そのリニは今、秋田犬を飼育する人に引き取られて元気で暮らしているらしく、無事でホッとしている。